

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ユニット内にて理念を掲示しており、職員間で共有している。	法人の理念を大きな礎として、各ユニットの理念を策定し実践に結び付けている。年度の終わりには、ユニット会議で理念の振り返り評価をし、目標である理念を毎年作成している。また、職員は「あいあいスタッフがきめたご利用者への5つの約束」を意識し理念の共有に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事「かかし祭り」参加したり、地域のスーパーにて買い物を行っている。	毎年、地域の「かかし祭り」コンテストに参加するなど、利用者のアイデアを取り入れた作品作りを行っている。8月に地域の有志お神輿団体が復活し、利用者も楽しんでいるとのことである。年4回、小国地区に広報誌を回覧し、移動スーパー「とくし丸」に事業所に立ち寄ってもらい、利用者の買い物の機会と得るとともに地域住民にも利用してもらえるよう地域貢献に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	会報誌の作成、配布により、入居につながることもあり、事業所に対して、理解して頂いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議が開催されており、GH内の取り組み、行事等を報告している。	運営推進会議は施設内に併設している特別養護老人ホームと共同で実施している。メンバーは行政、地域包括支援センター、市の介護保険課、町内会長が参加し事業所の取り組み状況など話し合いを行っている。会議記録は閲覧しやすい場所に設置している。	運営推進会議は外部の様々なメンバーが参加し、地域の理解と支援を得るために、意見をもらいサービス向上に繋げる貴重な機会である。今後は更に、案内を出している家族の参加ができるよう工夫するなど積極的に働きかけていくことを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月介護支援相談員の受け入れをしており、内容を職員が閲覧できるようにし、サービスに繋がられるように、職員間で共有している。	小国支所、地域包括支援センター越路、市の介護保険課の担当者とは、運営推進会議を通して事業所の現状を報告しており、連絡・相談し合い顔の見える関係が築かれている。定期的に市の介護サービス介護相談員も受け入れ、相談業務記録票兼報告書が届くと、職員や家族にも内容を確認できるよう対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設全体の研修等に参加し、研修内容の把握ができるよう取り組んでいる。今現在、拘束は行われていない。	今年度の取り組みとして、特別養護老人ホームの中の1ユニットが身体拘束等虐待防止委員会となり、法人全体の会議や研修の実施を計画的に行っている。リーダー会議では、各ユニットのリーダーが現状の報告を行い、個々の問題を確認し合い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設全体の研修等に参加し、研修内容の把握ができるよう取り組んでいる。随時、話し合いを行い、防止に努めている。	コロナ感染のために研修に参加できないこともあったが、利用者への言葉がけなど、不適切なケアを見かけた場合は現場で注意し合っている。また利用者や職員の様子から関係性が悪化し、お互いに疲労やストレスが生じる場合は、必要に応じてユニットを移動するなど配慮している。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要性を考え、本人、ご家族等を含めての多職種専門職員にて検討を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者、ケアマネージャー中心に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	アンケートの実施やサービス担当者会議にて意見を伺い、ユニット内にて検討を行っている。	家族からの意見・不満・要望などを集めるため、玄関に回答しやすいアンケートを設置したり、満足度調査を実施し何でも言ってもらえるような環境づくりに留意している。利用者からは日常生活に関する意見や要望が多く、速やかな改善に向けて進めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月行っているリーダー会議やユニット会議にて意見する機会がある。	月1回のユニット会議や日々の業務での意見聴取や情報交換を通じて検討しながら調整が行われている。会議記録は、利用者一人ひとりへ丁寧な支援方法の確認が明記されているが、運営に反映されるような意見・提案は見受けられない現状である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望アンケートをとりながら、シフト調整を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修、カンファレンス、サービス担当者会議等の参加等にて、育てる取り組みを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修等の参加出来ず。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に不安や希望等をお聞きし関係性作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人、家族に寄り添い、それぞれが必要なことを話し合い、プランに繋げている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人と家族のそれぞれの意向を聞いている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人に対しての傾聴を実施し、行事、レク、軽作業を通じて共同生活を過ごされている。		
	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	希望時の面会やサービス担当者会議への参加、希望時の外出が行われている。また、随時説明も行っている。	事業所の暮らしぶりを伝える活動報告を表した広報誌や、毎月送付するお便りの中には、居室担当職員のコメント欄が掲載されている。日々の暮らしの出来事や気づきの情報共有を大切に、本人と一緒に支えていくための協力関係が切れないように努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族、親族以外の友人や知り合いの面会や電話、手紙のやり取りを継続できる環境作りを行っている。	友人との電話や手紙のやり取りなど、利用者と馴染みの人との関係が継続されるよう支援している。法人の他施設へ住み替えをした利用者が訪ねて遊びに来ることもあり、継続的な交流ができるよう対応に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う仲間と関係性が大切にできる環境作りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、同じ法人内の特養へ入所される場合もあり、面会や必要に応じて情報提供等を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意向確認等、話し合いの他、普段の関わりの中から本人の思いや希望等の把握に努めている。困難な場合は、家族の話の他、日常生活での本人の言動、表情等からくみ取る様務めている。	入居前には、管理者と計画作成者が利用者の自宅へ訪問し、今までの暮らし方など、本人と家族から意向や希望を聴取している。常に、家族と介護職員、看護師が話し合い、利用者はどういう気持ちで過ごしたいのか聞き取るよう工夫している。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時、その後も本人や家族からお話を聞かせて頂き、今までしてきたことを出来るだけ継続できるよう努めている。	事業所独自の介護連絡票は、利用者の全体像を把握できる様式用紙となっており、毎年1回は更新されている。取り組んでいた編み物や趣味のクロスワードパズルを事業所での生活に取り入れたり、朝食にパンを食べる利用者にはパンを提供するなど、これまでの生活リズムが続けられるように個々の暮らし方を職員間で共有し支援している。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員一人一人が現状把握を行い、情報共有できるよう随時話し合いを行っている。定期的にカンファレンス実施にて、状態に合ったサービスを行えるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的にモニタリング、カンファレンスを行っている。本人、家人、職員間で話し合いを行い、課題解決に向けたサービスについて、それぞれの意見を反映させ、計画が作成できるよう心掛けている。	入居が決まった時点でアセスメントが行われ、1ヶ月後にリーダー・居室担当者・計画作成者・ユニット職員・看護師・管理者等が参加し定期的にユニット内でカンファ会議を行い見直している。コロナ禍の時、遠方の家族には計画書を家族に送り、見てもらい電話で口頭で介護の説明し印鑑、サインをもらうことが多かったが、コロナが落ち着いた時点で、サービス担当者会議を開けるようになってきている。モニタリングでは、日々の関わりを大切にし利用者の言葉など記録に残し、介護計画に反映できるよう心がけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を記録に残し、申し送りをするなどで情報共有し、支援にあたっている。また、普段の様子できるだけ細目に残すこと状況把握でき、介護計画の見直しにつながっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人一人のその時の状況や希望に合わせた対応が出来る。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ渦の中、なかなか地域との関わりが困難であるが、かかし祭りに参加したり、ドライブ等で地域にある名所へ出かけ、楽しまれている様子見られる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	併設している特養のかかりつけ医に月1回の往診を行っており、NSと連携しながら、状態に合わせて薬の変更等を行っている。必要に合わせて、受診対応も行っている。	併設特別養護老人ホームの嘱託医師が月に一度定期的に往診している。歯科や眼科等の受診は家族が主に行っており、難しいときは、事業所職員が送迎対応している。家族送迎の受診は医療機関へ情報提供書を持参してもらい、看護師が、サポートセンターを通して詳しく説明した形で、医療と事業所が出来るだけ連携が取れるような体制となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	Nsが在籍しており、その都度相談ができています。また、受診先への細かい連絡、連携を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	管理者、NSが入退院に関わる情報交換を常に行っており、連絡、連携を図り、受け入れ態勢を整えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期に関する意向をご家族へ伺っており、確認書を交わしている。状態変化により、希望が変わる場合もあり、随時、確認も取っている。その他、緊急時家族連絡表を使用し、連絡が取れる体制作りを行っている。終末期について研修も行っている。	入所時の説明の中で、「重度化・終末期に向けた方針の共有と支援」についての事業所の指針を説明し、署名をもらっている。その後、利用者の状態に変化があった時、家族に再度の説明を行い、嘱託医師から受診の結果と現状等の話しを共に聞き、利用者の今について話し合いが行われている。連携を取りながらの支援が行われている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時は、必要に応じて、管理者やNSへ指示をもらいながら対応している。	事故発生時や感染症対応に関するマニュアル、緊急時のフローチャート、整備・誤薬時の対応等のマニュアルは、併設の特別養護老人ホームと共用のマニュアルが整備されている。	急変や事故は何時発生するかわからない現状がある。特養併設の良さとともに、今後は、応援が来てくれるまでの、初期対応や応急手当などの具体的な研修や訓練を、事業所が定期的に行い、すべての職員が受け、実践的に身に付くように継続的に開催されることが望まれる。参加職員の状況・その時の参加者の様子など、学びを促す事を行いながら、職員全体で「日々備えること」を共有できるよう努めることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年研修を実施し、消防署より指導を受けている。	毎年6月と12月にマニュアルを整備し、年2回火災を想定した、消防署の指導を受けての訓練を行っている。事業所内にはヘルメットや災害時必要な物品など置いてあるが、それらは、緊急時に使うことが多いことを考慮し、誰でも分かる場所、支援に来られた職員、応援に来られた地域の方たちにも分かるように配置するなどを、職員で話し合いながら工夫し、協力体制を築いていくことが期待される。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声掛け、対応には十分に配慮し、研修も実施している。	事業所では今年度「認知症ケアとプライバシー保護」の法人主催の研修会に参加している。そこでは「食事・排泄・入浴・着脱」などの中でプライバシーについて考える研修を行っている。今後は、プライバシー保護に関するマニュアルが整備されることが望まれる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中から希望を伺い、対応行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	体調不良に合わせた対応も含め、個々のペースに合わせた生活ができる環境作りを実施している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容の実施や理容室の使用にてのヘアカットをされている。利用者によっては基礎化粧品を使用している方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	可能な限り、希望されたり、好みの物をお出しできるように、行事食も実施している。また、希望者がいるため、朝食はパン対応を行っている。	事業所では3食業者から配達される食材で提供されている。コロナ禍前は外食の楽しみもあったが、今は、行事食や利用者の声から、弁当、ラーメン・朝食のパン希望などを聞き取りながら提供されており喜ばれている。また、利用者がそれぞれ声掛け合いながら、テーブルを拭き合うなど、微笑ましい光景も見られた。もやしの根切りなど職員と共にやれることに参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	看取り対応の方もいるため、NS、管理栄養士を中心に相談しながら、GHでできる対応を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。必要に応じて、介助や歯科往診を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の状態に合わせてたトイレ誘導やおむつ対応を行っており、状態に合わせて、パット類の検討を行っている。	利用者の状況に合わせて職員は排泄パターンを把握し、声掛けやトイレ誘導など、それぞれの利用者のタイミングにあわせて支援を行っている。また、利用者の状況に合わせてパット類の検討など行いながら、トイレでの排泄や排泄の自立への声掛けなどを工夫している。「排泄に関わる自立への支援」など、利用者の動作や意欲への言葉かけなどに配慮しながらの支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日中の水分摂取を促しながら、必要に応じて、NSへ相談し、排便コントロールを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	ほぼ毎日入浴日を設けており、随時、入浴の声掛けをし、必ず週2回は入浴されている。本人の状態に合わせた介助も行っている。	入浴はほぼ毎日可能な状況である。各ユニットにある浴槽に月曜日から土曜日まで午前中入浴時間の中で、約週2回の入浴を支援している。状態の変化や低下が見られる方には廊下続きの併設の特別養護老人ホームでの機械浴の使用も可能である。また、寒い時期には足湯などの支援も行なわれており、状態に合わせた対応が提供されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ADLが低下している方や浮腫がある方等はまめに声掛けを行い、休息を促している。また、本人のペースに合わせて、安心して休める環境作りを行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬表を見ながら、変更時も含め、職員全員が状態観察を行っており、随時、NSへ相談、報告を行っている。必要に応じて指示をもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	他者と一緒に日々の軽作業を行い、可能な限り、好きな物が食べれる(イベントを含め)趣味を継続できる環境作りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症対応にて外出がしづらい環境であったが、可能な時期の家人との外出やドライブなどを行うことができた。	コロナが落ち着いてきた今年は、面会制限もなく、家族からの連絡があれば、外出・外泊も自由な状況になっている。事業所周りの散歩などには何時でも出かけられるよう職員も配慮している。5類以降は家族と共に、墓参りなどの外出者もおられる。また、事業所前には「移動スーパー」が来てくれるので、自ら買い物する機会を楽しみにしている。事業所の近くには自然豊かな大きな公園があり、昨年や今年春までは、ドライブなどを楽しみながら、車の中から、窓越しに花見や周りの景色を楽しんでいた。今年はそこで行われる「かかし祭り」に利用者、職員が力を合わせて大きな作品を製作中であり、その事を楽しみにしながら制作作品づくりに励んでおられた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者によっては小銭を持参され、自己管理し、買い物を行っている方もいる。ほとんどは、家人へ相談し、施設管理させて頂いている。買い物は自由にされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を使用されている方や友人と手紙のやり取りをしている方もおり、必要に応じて必要な支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせて壁画作りを利用者一緒に行なっている。可能な限り、季節感を感じることができる行事、壁画を継続して行っている。	2つのユニットは、綺麗に掃除され、ほぼ同じ構造ながら共用空間には、それぞれ展示物や空間の利用などには個性が感じられ、壁の使い方や利用者の個室の名前表示など、それぞれ丁寧な配慮が感じられた。事業所での生活がのびのびとした生活する場所として、また、心地よく過ごせる場所、寛げる場所として工夫されている様子が窺えた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った仲間で過ごせる食席を適宜検討し、職員間で相談しながら対応行っている。また、ADL低下等で必要な変更も利用者へ相談しながら行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内は、可能な限り本人の過ごしやすい、慣れた物を使用しながら、動きに妨げにならない環境作りを本人と相談しながら行っている。	居室には、事業所で用意するベットやタンス・エアコン等の他、テレビや自宅で可愛がっていたぬいぐるみや、使い慣れた椅子やパイプハンガー等、それぞれの好みのものを持ち込まれ、本人が生活しやすいように配置されており、本人が日々の活動で制作した絵や書道や写真が飾られ、その方らしい部屋での生活が窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職員全員で個々の状態観察を行い、必要に応じて、本人の状態に合わせた環境作りを随時行っている。また、可能な限り、自立支援に基づいた対応を行っている。		